

新約聖書とその思想 —パウロ研究（3）—

S. Ashina

<前回>オリエンテーション

・テキスト：

Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece*, Deutsche Bibelgesellschaft, 28.Aufl, 2012.

Kurt Anders Richardson, "Schleiermacher and Romans", in: Daniel Patte and Cristina Grenholm (eds.), *Modern Interpretations of Romans*, Bloomsbury, 2013.

Cranfield (ICC) などの注解書

・演習予定：10/6, 13, 20, 27, 11/10, 17, 27, 12/1, 8, 22, 1/5, 11, 18

1. オリエンテーション・打ち合わせ：10/36

1'. 導入：10/13

2. 基本箇所を読解＋注解書：10/20～

Rom.3.1-

3. 研究文献 → 分担し発表する。

<導入>

(1) ローマの信徒への手紙（新共同訳）

第1章

◆挨拶

1:1 キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、召されて使徒となったパウロから、—— 2 この福音は、神が既に聖書の中で預言者を通して約束されたもので、3 御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、4 聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです。この方が、わたしたちの主イエス・キリストです。5 わたしたちはこの方により、その御名を広めてすべての異邦人を信仰による従順へと導くために、恵みを受けて使徒とされました。6 この異邦人の中に、イエス・キリストのものとなるように召されたあなたがたもいるのです。—— 7 神に愛され、召されて聖なる者となったローマの人たち一同へ。わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

◆ローマ訪問の願い

8 まず初めに、イエス・キリストを通して、あなたがた一同についてわたしの神に感謝します。あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられているからです。9 わたしは、御子の福音を宣べ伝えながら心から神に仕えています。その神が証ししてくださることで、わたしは、祈るときにはいつもあなたがたのことを思い起こし、10 何とかしていつかは神の御心によってあなたがたのところへ行ける機会があるように、願っています。11 あなたがたにぜひ会いたいのは、“霊”の賜物をいくらかでも分け与えて、力になりたいからです。12 あなたがたのところ、あなたがたとわたしが互いに持っている信仰によって、励まし合いたいです。13 兄弟たち、ぜひ知ってもらいたい。ほかの異邦人のところと同じく、あなたがたのところでも何か実りを得たいと望んで、何回もそちらに行こう

と企てながら、今日まで妨げられているのです。14 わたしは、ギリシア人にも未開の人にも、知恵のある人にもない人にも、果たすべき責任があります。15 それで、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を告げ知らせたいのです。

◆福音の力

16 わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。17 福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。

◆人類の罪

18 不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されます。19 なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らにも明らかなからです。神がそれを示されたのです。20 世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。21 なぜなら、神を知りながら、神としてあがめることも感謝することもせず、かえって、むなしい思いにふけり、心が鈍く暗くなったからです。22 自分では知恵があると吹聴しながら愚かになり、23 滅びることのない神の栄光を、滅び去る人間や鳥や獣や這うものなどに似せた像と取り替えたのです。24 そこで神は、彼らが心の欲望によって不潔なことをするにまかせられ、そのため、彼らは互いにその体を辱めました。25 神の真理を偽りに替え、造り主の代わりに造られた物を持ってこれに仕えたのです。造り主こそ、永遠にほめたたえられるべき方です、アーメン。26 それで、神は彼らを恥ずべき情欲にまかせられました。女は自然の関係を自然にもとるものに変え、27 同じく男も、女との自然の関係を捨てて、互いに情欲を燃やし、男どうしで恥ずべきことを行い、その迷った行いの当然の報いを身に受けています。28 彼らは神を認めようとしなかったので、神は彼らが無価値な思いに渡され、そのため、彼らはしてはならないことをするようになりました。29 あらゆる不義、悪、むさぼり、悪意に満ち、ねたみ、殺意、不和、欺き、邪念にあふれ、陰口を言い、30 人をそしり、神を憎み、人を侮り、高慢であり、大言を吐き、悪事をたくらみ、親に逆らい、31 無知、不誠実、無情、無慈悲です。32 彼らは、このようなことを行う者が死に値するという神の定めを知っていながら、自分でそれを行うだけではなく、他人の同じ行為をも是認しています。

第2章

◆神の正しい裁き

2:1 だから、すべて人を裁く者よ、弁解の余地はない。あなたは、他人を裁きながら、実は自分自身を罪に定めている。あなたも人を裁いて、同じことをしているからです。2 神はこのようなことを行う者を正しくお裁きになると、わたしたちは知っています。3 このようなことをする者を裁きながら、自分でも同じことをしている者よ、あなたは、神の裁きを逃れられると思うのですか。4 あるいは、神の憐れみがあるを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と寛容と忍耐とを軽んじるのですか。5 あなたは、かたくなで心を改めようとせず、神の怒りを自分のために蓄えています。この怒りは、神が正しい裁きを行われる怒りの日に現れるでしょう。6 神はおのおのの行いに従ってお報いに

なります。7 すなわち、忍耐強く善を行い、栄光と誉れと不滅のものを求める者には、永遠の命をお与えになり、8 反抗心にかられ、真理ではなく不義に従う者には、怒りと憤りをお示しになります。9 すべて悪を行う者には、ユダヤ人はもとよりギリシア人にも、苦しみと悩みが下り、10 すべて善を行う者には、ユダヤ人はもとよりギリシア人にも、栄光と誉れと平和が与えられます。11 神は人を分け隔てなさいません。12 律法を知らないで罪を犯した者は皆、この律法と関係なく滅び、また、律法の下にあって罪を犯した者は皆、律法によって裁かれます。13 律法を聞く者が神の前で正しいのではなく、これを実行する者が、義とされるからです。14 たとえ律法を持たない異邦人も、律法の命じるところを自然に行えば、律法を持たなくとも、自分自身が律法なのです。15 こういう人々は、律法の要求する事柄がその心に記されていることを示しています。彼らの良心もこれを証しており、また心の思いも、互いに責めたり弁明し合って、同じことを示しています。16 そのことは、神が、わたしの福音の告げるとおり、人々の隠れた事柄をキリスト・イエスを通して裁かれる日に、明らかになるでしょう。

◆ユダヤ人と律法

17 ところで、あなたはユダヤ人と名乗り、律法に頼り、神を誇りとし、18 その御心を知り、律法によって教えられて何をなすべきかをわきまえています。19 -20 また、律法の中に、知識と真理が具体的に示されていると考え、盲人の案内者、闇の中にいる者の光、無知な者の導き手、未熟な者の教師であると自負しています。21 それならば、あなたは他人には教えながら、自分には教えないのですか。「盗むな」と説きながら、盗むのですか。22 「姦淫するな」と言いながら、姦淫を行うのですか。偶像を忌み嫌いながら、神殿を荒らすのですか。23 あなたは律法を誇りとしながら、律法を破って神を侮っている。24 「あなたたちのせいで、神の名は異邦人の中で汚されている」と書いてあるとおります。25 あなたが受けた割礼も、律法を守ればこそ意味があり、律法を破れば、それは割礼を受けていないのと同じです。26 だから、割礼を受けていない者が、律法の要求を実行すれば、割礼を受けていなくても、受けた者と見なされるのではないですか。27 そして、体に割礼を受けていなくても律法を守る者が、あなたを裁くでしょう。あなたは律法の文字を所有し、割礼を受けていながら、律法を破っているのですから。28 外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、また、肉に施された外見上の割礼が割礼ではありません。29 内面がユダヤ人である者こそユダヤ人であり、文字ではなく“霊”によって心に施された割礼こそ割礼なのです。その誉れは人からではなく、神から来るのです。

(2) ローマ書の構成

松本治三郎『ローマ人への手紙 翻訳と解釈』日本基督教団出版局、1966年。

A. 「まえがき」(1・1—17)：

「まず、教会への挨拶」(1—7)

「つぎに、手紙を書く理由」(8—15)

「さいごに、主題とテキスト」(16—17)

「この短いまえがきの中に、根本的には、すでにこの手紙で言おうとしているすべてのことが、言われている。したがってここにパウロの、そして新約聖書の、歴史的にも神学的にもきわめて重要な、言語と概念がでてくる。」(57)

B. 「第一編 信仰による神の義」(1・18—4・25)

神の義を、

「一 人間の罪と神の審き」(1・18—3・20)

「1 神の怒りの下にある異邦人」(1・18—32)

「2 すべての人間の審きとその規準」(2・1—16)

「3 審きの下にあるユダヤ人」(2・17—3・8)

「4 神の前に罪責を負う人間」(3・9—20)

「二 キリストにおける神の義の啓示として、説明し」(3・21—31)

「三 その聖書証明を試みる」(4・1—25)

C. 「第二編 人間と世界における神の義・救いの実現」(5・1—8・39)

「第三編 イスラエルの躓きにおける神の義」(9・1—11・36)

「第四編 信仰による人間の生活」(12・1—15・13)

「おわりに」(15・14—16・27)

3. まえがきの意義

アガンベン『残りの時 パウロ講義』岩波書店。

・「パウロス・ドゥーロス・クリストゥ・イエスゥ、クレートス・アフォーリスメノス・エイス・エウアンゲリオン・テウ」(10の言葉)

「パウロ、僕=奴隸、救世主イエス」

・「救世主イエスの僕として召され、神の福音を告げるために使徒として選り分かれたパウロ」(cf. 「召されて使徒となった救世主イエスの僕」)

・「サウル」・「大いなる者」(サウロス、王家の名)と「パウロ」・「小さい、取るに足りない」(使徒がメシア的な召命を十全に引き受ける瞬間に与えられるメシア的な渾名。姓ではない)。王家から賤民へ。

・メシア的な僕と定められた瞬間に、奴隸と同様に、名前を失って、たんなる通り名で呼ばれねばならない。使徒である前にまずもって奴隸

・パウロが知っているのは、イエス・キリストという名前の人物ではなく、救世主のイエス、イエスという救世主なのだ。「何千年にもおよぶ習性は、キリストスという言葉翻訳しないままにしてきたことによって、ついにはパウロのテキストから「メシア」という語を消滅させる結果となってしまった」(26)

「「キリストス」という語のもともとの意味についてのわたしたちの忘却をパウロのテキストに投影しているだけだ」(30)